宮城県小牛田町文化財調査報告Ⅰ

駒米遺跡

—宮城県遠田郡小牛田町北浦字駒米—

第二次発掘調査報告書

1973

宮城県小牛田町教育委員会

宮城県小牛田町文化財調査報告 I

駒　米　遺　跡

―――― 宮城県遠田郡小牛田町北浦字駒米 ――――

第二次発掘調査報告書

1 9 7 3

序

小牛田町教育委員会
教育長 佐々木　京　一

わが町の遺跡調査については、昭和１３年に元東北大学教授伊東信雄博士らによって、縄文早期に属する素山貝塚の発掘があげられます。

そのあと、町史編さん上の資料として、郷土の各所に分布している遺跡を調査することの必要にせまられ、当該地である北浦字駒米地帯の８世紀末集落遺跡も、調査の対象として、昭和４１年３月に第一次発掘を行いましたが、確証を得るに至りませんでした。

今回この地帯が役場新庁舎敷地に選ばれ、建設の運びとなったので、貴重な遺跡の破壊をみぬうちにと、急きょ第二次調査を行いました。

その結果多数の出土品が発見され、この遺跡は奈良末期より平安初期にかけての蝦夷征伐の最盛期を中心に営まれた竪穴住居跡であることが、ほぼ確認することができました。

こゝに調査の結果がまとまったので、町史編さん資料との関連とも考えあわせ、駒米遺跡第二次発掘調査報告書として、発行することにしたものであります。

郷土資料あるいは、広く学術上の資料として、御活用いたゞければ幸甚です。この調査に際しては、小牛田農林高等学校辺見鞆高先生および同校郷土研究班の生徒諸君の御協力によるもので、その御努力、ご奉仕にたいし深甚なる感謝を申上げるものです。

昭和４８年３月１日

例　　言

1. 本書は「駒米遺跡」の発掘調査にかかる報告書である。
2. 「駒米遺跡」を中心とする地域は小牛田町役場庁舎建設予定地に指定され、壊滅寸前の状態にあったため、宮城県小牛田農林高等学校郷土研究班が、昭和４６年３月２５日より、１２日間にわたって独自に、第二次緊急発掘調査を行なった。
3. 出土品の整理は同高校郷土研究班並びに調査に参加した国学院大学文学部学生、辺見　端君らが担当した。測量並びに測量図作製、撮影等にも同君を煩わした。
4. 本稿の執筆並びに編輯は宮城県小牛田農林高等学校の辺見鞆高教諭に委嘱した。
5. 本遺跡の発掘調査に際し、東北学院大学教授加藤　孝氏並びに駒米在住の遠藤勝義氏御一家には大変お世話になった。御好意に対し衷心より謝意を表するものである。
6. 本書は宮城県小牛田町教育委員会の刊行するところである。

（尚、本書には第一次調査時における出土資料をも網羅した。）

昭和４８年３月１日

宮城県小牛田町教育委員会事務局

駒米遺跡目次

序　文
例　言
Ⅰ　第二次発掘調査の目的 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と現状 …… 2
Ⅲ　発掘調査の経過 …… 2
Ⅳ　竪穴式住居跡の概況 …… 3
Ⅴ　出土品（第一次調査分を含む） …… 5
Ⅵ　考　　察 …… 11

写真・図版 目次

第１図　駒米遺跡位置図
第２図　駒米遺跡全景
第３図　周溝の一部
第４図　土器出土状態
第５図　小牛田町航空写真
第６図　駒米遺跡全景
第７図　竈　　跡
第８図　竪穴住居址
第９図　竪穴住居址
第１０図　甑出土状態
第１１図　石釧模造品出土状態
第１２図　砥石出土状態
第１３図　砥石出土状態
第１４図　甑に転用された土師器鉢・壺
第１５図　土師器 坏
第１６図　土師器 埦
第１７図　鉄　　鏃
第１８図　駒米遺跡付近略図
第１９図　Ⅰ・Ⅱトレンチ実測図
第２０図　第Ⅱトレンチ実測図
第２１図　竪穴住居址実測図
第２２図　駒米遺跡出土品（１～２２）
第２３図　駒米遺跡出土品（２３～３３）
第２４図　駒米遺跡出土品（３４～４４）
第２５図　駒米遺跡出土品（４５～４７）

第1図　駒米遺跡位置図

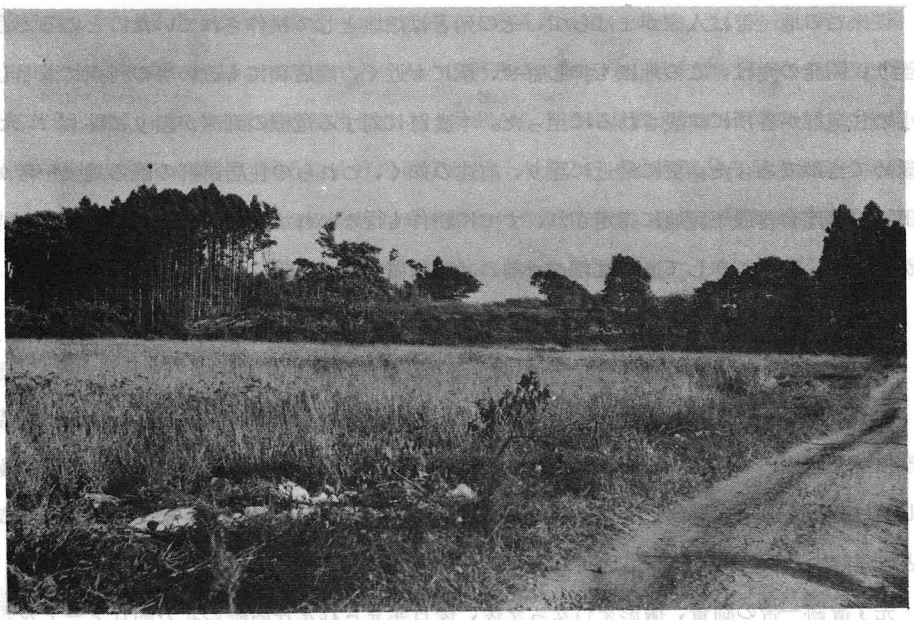
（○は遺跡を示す。）

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の五万分の一地形図を複製したものである。（承認番号）昭四八、第一二五号」

駒米遺跡第二次発掘調査報告書

I　第二次発掘調査の目的

本遺跡は小牛田町北浦字駒米にある奈良末期より平安初期へかけての集落跡である。昭和41年3月、小牛田町史編纂資料収集の目的を以て本遺跡の発掘調査が行なわれ、鉢・深鉢・甕・壺・椀・坏等の土師器、大甕・坏等の須恵器、その他鉄鏃・鉄片等が発見された。当然竪穴住居跡の発見が期待されたが、確認するまでには至らなかった。その後、宮城県斎藤報恩農業館講習生らによるトラクター耕作が進められ、現状の一部が地山に至るまで破壊・撹乱されるに至った。その後、豪雨に見舞われ、土砂の流失等があって、いよいよ遺跡の一部が明瞭に確認されるに至った。又この地一帯は小牛田町役場庁舎建設予定地に指定され、買収も進み、近く整地作業が行なわれることになっていた。もはや本遺跡の調査は焦眉の急を告げるものであった。



第2図　駒米遺跡全景（遺跡西方より望む）

宮城県小牛田農林高等学校郷土研究班では本遺跡の破壊・消滅を見るに忍びず、記録を作成するため直ちに緊急調査を実施することになった。この地域には未だ4～5基の住居跡が破壊を免れ、残存しているものと推定されるが、これらすべてに調査を及ぼすことは同班の事情から見て不可能であった。この地域の西端に位置する一住居跡の発掘・調査にとどめなければならなかった。従って今回の調査は第一次発掘調査における不備を補足するという目的を以て行なわれた。

Ⅱ　遺跡の位置と現状

本遺跡は東北本線小牛田駅の西南方約７００メートルの地点に当り、１６メートルの標高を示す、やや高燥な地形を占めている。この台地は江合・鳴瀬両川の中間に展開する水田中にあるが、水田との比高はおよそ6メートルである。本遺跡の周辺を見渡すと１キロ内外の範囲内には縄文早期末に属する素山貝塚・新山前貝塚をはじめ、彫堂縄文前・中期遺跡・彫堂縄文中期遺跡・峯山縄文晩期遺跡等がある。更に古墳時代に入っては京銭塚古墳・保土塚古墳等計１６基の古墳が群在している。更に土師器・須恵器を伴う奈良～平安期の遺跡としては峯山遺跡をはじめ、山内遺跡・西原遺跡・化粧坂遺物散布地・狐山遺跡・小沼遺跡等が挙げられる。又彫堂には「長館」をはじめとする中世の館跡群も残存している。従って遺跡遺物の上から判断すると、この周辺には縄文文化時代早期末より人々が住みつき、その後も断絶することなく中世にまで及んでいることが知られる。

従来この地一帯は人家がまばらで、その殆どは畑地として耕作されていた。ところが近年に至り、開発の波は、この地にも押し寄せ、駅にも近く、商店街にも近い等の利点に着目して大小の住宅群が各所に建設されるに至った。本遺跡に対する危機の到来が頻りに叫ばれたのも極めて当然であった。更に最近に至り、前述の如く、これらの住居跡群の眠る地域一帯が小牛田町役場庁舎建設予定地に指定され、すでに耕作も行なわれず、いよいよ、整地作業を待つばかりとなった。こうして遺跡は壊滅寸前の状態に置かれるに至った。

Ⅲ　発掘調査の経過

調査は昭和４６年３月２５日に開始することとした。前日、終業式は終り、生徒は実際上春季休業を迎えるわけであるが、時恰も農繁の時期に差しかかり、班員達は家業の農耕にも着手しなければならず、期待通りの人員の確保は不可能であった。僅かに参加した２～３名の班員と国学院大学学生１名、人夫３名それに筆者が加わって進めることとした。

先ず遺跡一帯の測量、撮影を行なった後、後日発見された住居跡の北方約６メートル付近に巾1.5メートル、長さ１０メートルのⅠトレンチを南北の方向に設定した。表土は意外に薄く、３０～４０センチで地山に到達した。土師器片・須恵器片等が少量発見されたが深耕のためか層は著しく攪乱されていた。トレンチの北半部には径２０センチ位のピットが発見されたが、果して柱穴か俄かに断定は出来なかった。この周辺には多数の小穴が見られたが、これは樹木の根によるものであろう。南半部には東西の方向に３０センチ巾の畑の畝状の溝が数条、地山に切り込まれていた。これらは何かの施設跡か、それとも深耕によるものか判定は不可能であ

った。

Ⅰトレンチの随所から有孔円盤破片３点が出土した。本トレンチの調査は第２日目の午后を以て終了した。

Ⅰトレンチの調査終了後、その南方約６メートル付近にⅡトレンチを設定することとした。先ず南北の方向に巾1.５メートル、長さ６メートル、東西の方向に巾２メートル、長さ8.５メートルのトレンチを、ほぼT字型に設定することとした。本トレンチ付近の一部は、すでに昭和４１年３月、発掘調査を終え、埋め戻し後、最近まで畑地として耕作されて来たところである。本トレンチの西端部は表土が薄く、僅かに２０～３０センチに過ぎないが東部・北部では６０～７０センチの厚さを示すところもあった。表土より少量の土師器・須恵器片・木炭片等が発見された。３月２７日（第３日目）に至り、いよいよ住居跡の一部及びカマド跡が発見された。この部分は後述するように住居跡の北壁に当っている。このトレンチを更に南へ拡大すると床面から砥石破片・石釧模造品・鉄製品破片（釘？）各１点等が発見された。又床面の南東隅付近においては７７センチ×９３センチのピット５も現われるに至った。連日、冷い西風が吹き続けたが、作業には却って好適であった。３月３０日に至り、住居跡の輪郭が、ほぼ想定されるに至った。４月１日（調査第８日目）は早朝から小雨に見舞われた。雨の止むのを待ち、午后４時頃より発掘を開始、同５時４０分終了した。４月２日（調査第９日目）に至り、柱穴３箇を発見、いよいよ竪穴住居跡の全容が浮き彫りにされて来た。竪穴住居の南壁近くの床面から大型砥石１点、更にそれに接近して長さ約２０センチ、巾約５センチの磨耗甚しい薄形砥石１点、小形砥石２点、荒砥破片１点等が発見された。又竪穴床面の南西部において土師器（椀？）口縁部破片１点、ピット２に接近して須恵器の鉢・坏の底部破片等が発見された。更に夕やみ迫る頃、竪穴の壁外（南側）において、５６センチ×７０センチ、深さ９２センチのピット（ピット１０）が発見された。本遺跡の発掘は事実上４月２日を以て終了した。この後、測量・撮影等を３日間にわたって行ない、４月５日を以て調査の一切を終了した。

Ⅳ　竪穴式住居跡の概況

この住居跡は東辺3.６８メートル、西辺3.５２メートル、南辺3.８６メートル、北辺3.３７メートルで、ほぼ方形のプランを示している。周溝の巾は南東隅、北東隅、北西隅が広く、平均13～15センチ位であるがその他の部分は狭く、平均８センチ位である。又周溝は、そのところどころが崩壊していて、確認困難な部分があった。又周溝の南西隅付近は焼土で埋没していた。周壁の高さは、ところによって差があるが、東壁は約５０センチで最も高く、西壁は僅か１５センチに過ぎなかった。これは東高西低の、この区域の地形をそのまま、反映したもので

第３図　周溝の一部（焼土で埋没していた）

あろう。同壁のうち北西部の一部には積み土の跡が認められた。すなわち地山の上に暗褐色土を盛り、更にその上に黄褐色土を載せている部分が確認された。尙北壁の西端部は耕作のため、すでに原形を失っていた。

カマドは北壁の中央部に位置しているが、一部は壁外に、はみ出している。粘土と小砂利による粗末な構築で、全面赤色を呈している。床面は平坦に、しかも固く突き固められ、ほぼ完全に原形をとどめている。尙床面の中央部には東西の方向に長さ約４０センチの浅い溝が確認された。この部分には約５０センチ四方にわたり強く火をかぶったあとが認められるが、勿論炉跡とすることは出来ない。

西壁の北寄りの部分には約４５センチにわたって周壁・周溝を欠き、しかも強く踏み固められたような部分が残存している。これは出入口であろうか。

柱穴は下記の通り３箇所に確認された。

ピット１（北西）１６センチ×１５センチ、深さ３１センチ

ピット２（北東）8.5センチ×１３センチ、深さ２７センチ

ピット３（南東）　８センチ×１３センチ、深さ２３センチ

ピット４（南西）に相当する部分には現在柿の老木が生えているから、その下に埋没しているものと思われる。柱穴は、すべて小さく浅いが、この小規模住居を支えるには充分であったろう。

床面の南東隅には７７センチ×９３センチ、深さ２０センチ（平均）のピット５がある。ピ

第1表　Pit 計測表　　単位cm

No.	長　径	短　径	深　さ	備　考
1	16	15	31	柱穴
2	13	8.5	27	柱穴
3	13	8	23	柱穴
4				柱穴存在？（現在柿の老木あり）
5	93	77	20	
6	18	11	7	
7	11	10	11	
8	29	22	12	
9	18	15.5	15	
10	70	56	92	
11	120	115	23	梅樹の掘り起し穴

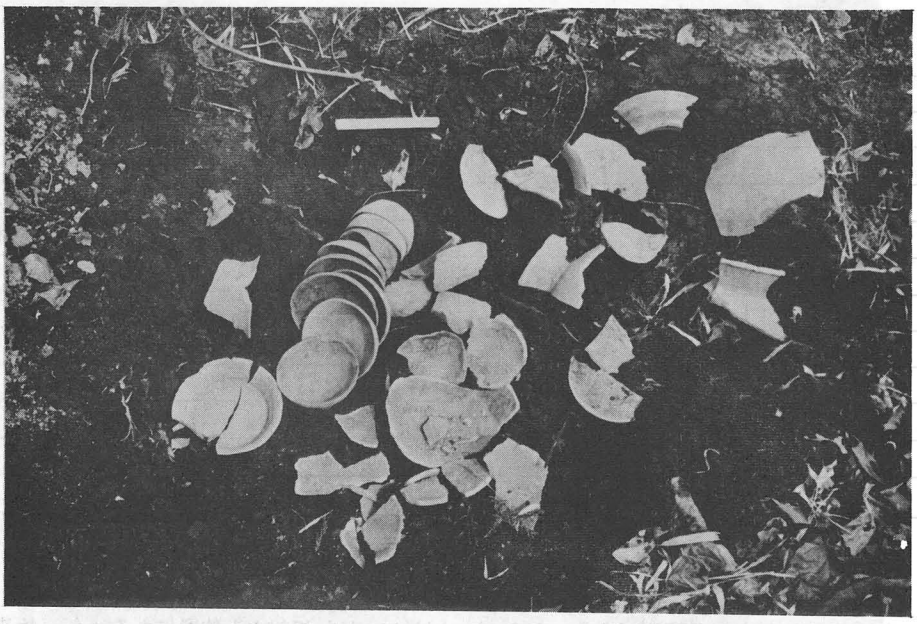
ットの南東端には突起部があって、南溝と東溝を遮断するような形態をとっているが、これは何を意図したものか不明である。このピットはカマドと相対する位置にあるから、炊事用の水溜め穴と見るより、むしろ貯蔵穴と見られる。その他床面の諸所に10箇以上の小ピットが見られるが、これは樹木の根の跡であろう。

竪穴の南壁外には（壁との距離4センチ）56センチ×70センチのピット10がある。92センチの深さを有し、穴の内側は直壁状をなしている。本竪穴関係ピット中では最大の深さを有し、遺物は蔵していない。果して、どのような機能を有していたか俄かに断定は下し難い。尚、東北学院大学教授、加藤　孝氏は秋田県羽白目遺跡等の調査結果から、これらの穴は当時烽をあげるために使用された櫓の柱穴で、これらに接近して更に幾つかの穴があるはずであると推定している。つまり烽遺跡であるというのである。これは傾聴すべき説であり、筆者も敬意を表している。又竪穴の北西部にある出入口と想定される部分の外側にはピット8・9があるが、これらの機能については目下不明である。更に床面の北東隅には1.15メートル×1.20メートル、深さ23センチの凹所があるが、これは昭和41年、梅樹が撤去された際に生じた掘り起し穴である。

V 出　土　品（第一次調査分を含む）

1. 土師器坏

口径11.3センチ、底径7.5センチ、器高3センチの完形品である。内黒で口縁部は内湾し、底部には張り出しがある。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成も不良である。整形も不完全で全体に多少の歪みがある。



第４図　土器出土状態（梅樹の掘り起し穴より発見された土師器・須恵器群）

2. 土　師　器　坏

口径１２センチ、底径８センチ、器厚 3.4 センチ。口縁部は内湾し、底部は幾分湾曲している。内黒で内面には放射状に整形した痕跡が認められ、外面には箆の跡が廻っている。焼成度は普通であるが、整形はやや不充分である。全体として厚みを感じさせる土器である。

3. 土　師　器　坏

口径１3.5 センチ、底径９センチ、器高 3.5 センチ、器厚は７ミリ位である。口縁部は内湾し、底面は僅かに湾曲している。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成は不良である。内外とも研磨されている。

4. 土　師　器　坏

口径１３センチ、底径 7.8 センチ、器高 4.3 センチで、口縁部はやや内湾し、器表面には段のあとが認められる。底面は湾曲し、座りは悪く安定しない。使用粘土・整形度・焼成度とも不良で褐色を呈する。

5. 土　師　器　坏

口径１4.7 センチ、底径１０センチ、器高 3.8 センチ、器厚７ミリの内黒の坏である。口縁部は内湾し、内外両面とも研磨されている。底面はやや湾曲し、多少張り出しがある。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成も不良である。

6. 土　師　器　坏

口径１３.６センチ、底径 8.3 センチ、器高 3.3センチの内黒の坏である。手捏ねで、整形度は悪く、歪みが感じられる。石英粒の混入した不精良粘土を使用し、焼成も不良である。褐色を呈する。

7. 土　師　器　坏

口径１３.８センチ、底径９センチ、器高 3.9 センチ、器厚６ミリ～８ミリで、内外両面とも研磨されている。内黒で底面はやや湾曲し、張り出しを持つ。轆轤痕は認められない。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成は不良である。

8. 土　師　器　埦

口径１６.７センチ、底径 7.7 センチ、器高 8.5 センチで丸底を有し、内黒である。手捏ねで、表面には整形のための刷毛目が認められる。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成も不良である。橙色を呈する。

9. 土　師　器　埦

口径１３.７センチ、底径７センチ、器高 5.1 センチ。内黒で口縁部はやや内湾している。又手捏ねで、整形も不完全であり、全体に歪みが感じられる。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成度も不良である。褐色を呈する。

１０. 土　師　器　埦

口径１０センチ、底径７センチ、器高５センチ。口縁部は内湾し、内黒である。内外両面には篦による整形のあとが顕著に認められる。底面には放射状に整形したあとを残している。砂粒混りの不良粘土を使用しているが、諸所に砂の移動したあとが認められる。

１１. 土　師　器　埦

口径１０センチ、底径 6.5 センチ、器高 6.5 センチの椀形土師器である。口縁部は内湾し、内黒で轆轤痕は認められない。内外両面とも研磨され、橙色を呈する。砂粒混りの不精良粘土を使用し、焼成も不良である。

１２. 土　師　器　埦

口径 9.８センチ、底径６センチ、器高５センチ。口縁部は内湾し、内外両面には研磨痕が認められる。口縁部付近の厚さは６ミリで内外両面とも黒色を呈している。砂粒混りの不精良粘土を使用し、焼成も不良である。

１３. 土　師　器　埦

口径１３.４センチ、底径 6.6 センチ、器高 4.4 センチの椀形土器である。口縁部は内湾し、糸底を有する。轆轤痕はなく、内外両面とも研磨され、底面中央部には指痕がある。砂粒混りの粘土を使用し、焼成も不良である。

14. 土師器 椀破片

口縁部破片であるため詳細は不明であるが、内湾口縁を有し、丸底と推定される。器厚は0.5センチ、轆轤痕は認められない。石英粒混じりの不良粘土を使用しているが、焼成は良好である。紅色を呈する。（実測図の計測は推定による。）

15. 高坏の脚破片及び坏破片

いずれも内黒様式で、轆轤痕は認められない。精良粘土を使用し、焼成も良好であるが、破片であるため詳細は不明である。

16. 須 恵 器 坏

口径13センチ、底径8センチ、器高3.8センチの糸切底を有する坏である。内外両面には轆轤痕が認められる。石英粒混りの不良粘土を使用し、焼成も不良である。

17. 須 恵 器 坏

口径14.4センチ、底径10センチ、器高3.8センチ、器厚（胴部）7ミリで、直立口縁を有する。胴部は膨らみを持っているが、底部へ行くに従って逓減する。内部には同心円状の轆轤痕が認められ、底部には稈のようなもので横位に擦ったあとがある。又内外両面には多くの腐蝕痕が認められる。多量の砂粒を含む粘土が使用され、焼成も不良である。

18. 須 恵 器 坏

口径15.3センチ、底径10センチ、器高4センチ。口縁部は外反し、胴部より底部へかけ削いだあとが認められる。底部には轆轤回転のあとがあり、又胴部には自然釉湧出のあとを残している。粘土には砂粒を含んでいるが、焼成は堅緻である。

19. 須恵器坏破片

口径13.4センチ、底径8.1センチ、器高3.9センチで器の外面には段がある。使用粘土、焼成度とも良好であるが、器全体に多少の歪みが感じられる。

20. 須恵器坏破片

口径13.6センチ、底径8.3センチ、器高4センチで、器の外面には段が認められる。使用粘土・焼成度・整形度とも、本遺跡出土土器群中では良好の方である。

21. 須恵器坏破片

口径14.4センチ、底径9.5センチ、器高3.6センチで、器の外面には段が認められる。焼成度は、やや劣るが、使用粘土・整形度とも前者同様良好である。

22. 須恵器鉢破片

口縁部は外反し、全面に轆轤痕が認められる。底径8.8センチ、器高5センチ、器厚0.4センチ、口径は14センチ位と推定される。砂粒混りの不良粘土が使用され、焼成も不良で

ある。

２３. 土 師 器 鉢

口径１７.５センチ、底部の欠損部分の径９センチ、器高１６.５センチ、器厚は約７ミリで、外反口縁を有する。口縁部には３段の輪積みの痕跡をとどめている。頸部には１条の沈線を繞らし、肩部から底部へかけては篦状工具による整形のあとが見られる。内面には無数の斑点と付着物が見られるが、これらは炭化物ではなく、かびであろう。故意に底面を打ち抜き、甑として使用したものと思われる。土器番号２４の壺の上に重なったままの状態で発見された。

２４. 土 師 器 壺

口径１０.８センチ、底径７.７センチ、胴部の最大巾は１３センチで、外反口縁を有する。口縁部の高さは２センチで、２段の輪積みの痕跡が認められる。器表面全体には篦状工具による縦位の擦痕が見られる。底部は幾分張り出し、轆轤痕は認められない。砂粒混りの粘土を使用し、焼成も不良である。

２５. 土 師 器 鉢

口径１５.６センチ、底径７センチ、器高は１５.２センチで、器厚は底部において７ミリ、胴部において６ミリ、頸部においては約７ミリである。口縁部は外反し、頸部には横位の擦痕が認められる。又肩部から底部に至るまで篦状工具による整形の磨痕が認められる。内面にも整形のあとが僅かに残っている。石英粒混りの不精良粘土を使用し、焼成も不良で、ところどころに再酸化の跡を残している。

２６. 長胴深鉢破片（土師器）

胴の片面及び底部を欠損している。現在における高さは約２３センチで、口縁部は外反し、表面には刷毛による整形のあとがある。内面には輪積みのあとが顕著に認められる。器厚は４.５ミリ位、使用粘土は、やや良好であるが、焼成度は不良である。橙色を呈する。（実測図の計測は推定による。）

２７. 土 師 器 深 鉢

口径１５.８センチ、底径８.７センチ、器高１８.２センチ、器厚６ミリ位の深鉢である。口縁部は外反し、頸部には一条の溝を囲繞している。外面には篦状工具による整形の跡を残している。又底部には多少の張り出しがあり、底面には木葉文を印している。砂粒混りの粘土を使用し、焼成は良好で堅緻である。

２８. 蓋

径１５.４センチ、蓋のかえしは７ミリで、蓋の内外両面には轆轤回転途上における同心円

状の砂の擦痕が認められる。つまみは径2.6センチ、高さは1センチで宝珠状をなしていない。砂粒混りの粘土を使用し、焼成度は不良である。

29. 土師器壺

口径14センチ、胴部径19センチ、底径9センチ、器高は21.5センチで、表面には整形のための刷毛使用の跡が認められる。内面には付着物の変化によると見られる無数の斑点がある。整形度はやや良好であるが、使用粘土、焼成度とも不良である。器厚は7ミリで褐色を呈する。

30. 甑

口径24.4センチ、底径10センチ、器高19.5センチ、器厚は約8ミリで口縁部は外反する。内黒で、頸部には段が認められる。又胴部より底部へかけ箆状工具による縦位の擦痕が一面に付されている。底部には幾分張り出しがあり、底面には木葉文を印している。砂粒混りの不精良粘土を使用し、焼成は不良である。

31. 土師器鉢胴部破片

胴部径14.5センチ、底径8センチ、現在における高さ12.5センチ、器厚は約6.5ミリで、内面には刷毛目がある。又付着物の変化によると見られる無数の斑点がある。使用粘土・焼成度・整形度とも不良である。褐色を呈する。

32. 土師器底部破片

底径9.3センチ、器厚0.9センチの土師器底部破片である。底部には張り出しがあり、底面には木葉文を印している。又内側には鮮明な籾痕がある。手捏ねで、器形は鉢であろう。

33. 須恵器甕破片

胴部以下は欠損している。口径21.5センチ、口頸部径13.5センチ、肩部巾約30センチで、やや肩下がりの傾向を示す。現在における高さは約20センチで器厚は7ミリである。口縁部は外反し、横位の擦痕が認められる。又肩部より胴部にかけて一面に斜めの敲き出し文が付され、内面には指痕が認められる。口縁部には自然釉の噴出した跡があり、又口頸部の内側にはコウロギの圧痕も認められる。砂粒混りの粘土を使用し、焼成度は普通である。貯蔵・運搬用具であろう。

34. 石釧模造品

径3.5センチ、内径1.9センチ、厚さ5ミリの表裏面とも研磨されたスレート製の輪である。表面半分には右から左の方向へ走る擦痕がある。他の半分には、その逆の方向に走る擦痕が付されている。石釧模造品と見られる。

３５. 有　孔　円　盤

径４センチの石製円盤であるが、やや楕円形に近い。2.5センチの間隔を置いて径0.2センチの孔が２箇穿たれている。その他第Ⅰトレンチ出土のものを合せると同様の有孔円盤破片５点（３５～３９）が発見された。

４０. 砥　石　破　片

3.6センチ×3.3センチ、厚さ１センチの小形砥石である。三面に使用痕が認められる。

４１. 砥　石　破　片

3.4センチ×3.2センチ、厚さ1.6センチの小形砥石である。三面に使用痕が認められるが、表面の一部には深い擦痕も認められる。この砥石は前者と共に元来一箇の砥石として使用されていたが、後二つに割れ、その後も、それぞれ別個の砥石として使用されたものであろう。

４２. 砥　石　破　片

長さ３センチの砥石小片であるが、これは荒砥であろう。

４３. 砥　　石

長さ１６センチ、巾4.2センチ、厚さ1.5センチ位の極度に磨耗した砥石である。表裏面、側面とも使用しているが特に表裏面の磨耗は甚しく、使用の限界に達している。先端は尖り、基部は稍々丸味を帯びている。

４４. 砥　　石

長さ１９センチ、巾９センチ、厚さ5.6センチの比較的大型の砥石である。両側面と表面の一部に使用痕が認められる。

４５～４７鉄鏃・鉄片・鉄環

大弓に使用された鉄鏃で、基部は約１センチ位欠損している。銹化甚しいが、ほぼ原形をとどめている（４５）。又鉄片４点（４６）、及び鉄環（４７）１点等が発見されたが、用途等詳細は不明である。これらのほか長さ3.9センチの棒状鉄製品破片及び１１点の鉄製品小片が出土したが実体は不明である。

Ⅵ　考　　察

本遺跡は駒米部落の南端に位置し、須恵器・土師器・鉄製品・砥石・石釧模造品・有孔円盤等を出土する竪穴住居跡である。

本遺跡における須恵器及び土師器の出土量を比較すると、須恵器は僅か７点位に過ぎず、他はすべて土師器で、しかもその大半が内黒様式に属している。又本遺跡においては坏と長胴形の鉢が併存している。（尚長胴の鉢の中には口頸部に一条の沈線を囲繞しているものも１～２点

発見された。）本遺跡出土土器類の特徴を更に追って見ると、口縁部には横位の擦痕が見られ、肩部から底部へかけては量産のためか、箆状工具で削いだ縦位の擦痕が認められる。これは多賀城市市川遺跡出土のものと共通している。又坏について見るならば、本遺跡においては高坏が殆ど姿を消している。器台は、おそらく木製品にかわったのであろうが、とにかく器台付のものは全く発見されない。更に土師器の坏も内黒様式に属するものが圧倒的に多い。又本遺跡においては丸底の土師器の甕・壺等が姿を消し、大型化した須恵器に置きかえられている。これらの点から見て、本遺跡の時期を奈良初期又は中期にまで遡らせることには無理がある。むしろ時期を下降させ、奈良末期より平安初期頃に位置ずけるのが妥当と思われる。本遺跡においては底部に張り出しを持ち、底面には木葉文を印した土師器類の出土が意外に多かったが、これらの特徴も8世紀より9世紀初頭へかけての東北地方の土師器のデザインであり、流行といえるものである。従って本遺跡は奈良末期より平安初期へかけての蝦夷征伐の最盛期を中心に営まれたものであろう。

この住居跡は北壁付近にカマドを備え、それと相対する位置には貯蔵穴を設け、しかもプランは方形を示す等この時期における竪穴住居のタイプを踏襲している。東壁が最も高く、東北壁がこれに次ぎ、西壁が最も低いのは傾斜面という立地条件から見て当然であろう。この竪穴住居跡は至って小規模である。柱穴を見ても、ここに立てられた柱が果して支柱としての機能を果し得たか疑われる程の太さである。この住居の収容能力は2～3名位が限界であろう。辺境における奈良末期より平安初期へかけての庶民住居のタイプが眼前に示された感じである。

この集落は、どのような性格を持つものであったろうか。本遺跡出土の土師器を見ると什器類が多く、いずれも日常生活と密着した生活用具である。それだけ庶民性の濃厚な集落といえる。続日本紀の記事によって8世紀末における当地方の状態を考えれば、単なる律令農民の集落跡と見るより、むしろ蝦夷と対峙していた柵戸の村落遺跡と見るのが妥当であろう。丘陵・台地と河川を組み合せた自然的好条件は決して彼等の見逃すものではなかったであろう。鉄鏃その他武具の一部と思われる多くの鉄製品破片の発見も、本遺跡が最先端における防衛村落であることを裏付ける一資料となるであろう。

この住居は果して、どのような終末を迎えたのであろうか。周溝の南西隅付近に焼土が堆積していたことは、すでに指摘した通りであるが、単にその部分だけではなく、この竪穴の諸所に焼土や灰の散乱が見られた。この事実は、この住居が火災によって放棄されたことを物語るものであろう。前述の床面中央部に見られた火をかぶった跡も炉跡ではなく焼亡を示すものと見られる。昭和41年度の第一次発掘調査の際、本住居跡の床面に相当する部分から多数の土師器類が発見された。しかも、それらの大部分は完形品のまま埋蔵されていた。中には2箇の土

師器が重なったままの状態で発見されたものもあった。すなわち壺の口の上に底面を打ち抜いた鉢を載せ、いかにも甑として使用している、そのままの状態で発見されたものもあった。これらは住居内における日常の生活面を、そのまま伝える情景であったかも知れない。火災によって突然放棄され、彼等の日常生活の舞台が、そのまま埋没したのであろう。

この遺跡から石釧模造品・有孔円盤・同時期の土師器片等が発見されたことは注目に値する。殊に石釧は東北においては福島県会津の大塚山古墳の出土例があるだけである。従ってこれは、わが国における石釧分布の北限を示すものである。又有孔円盤は第Ⅰトレンチ発見のものを合せると計5点になる。この地には古墳又は何らかの祭祀遺跡があったのであろう。今回の調査において古墳時代の遺跡そのものは発見されなかったが、両時期の遺跡が重複しているものと思われる。彫堂古墳時代遺跡と、この地とは至近距離にある。当時この地が彫堂古墳時代集落群の末端部に当っていたのであろう。

小牛田町内には土師器・須恵器を出土する遺跡が意外に多い。すなわち土塁と空壕をめぐらし円面硯・塑造の仏像等を出土した山内遺跡をはじめ、取手付壺・乾漆片・布目瓦等が発見された西原遺跡、高台付甕・取手付壺・墨書土師器等が出土した峯山遺跡、布目瓦・墨書土師器等を伴った狐山遺跡、青磁・白磁片等の出土を見た小沼遺跡、須恵器・土師器・布目瓦破片等が散乱している化粧坂遺物散布地等がある。遺物の上から見れば一部を除き、すべて奈良〜平安初期へかけての時期に属するから或る時点においては、これらの集落群が指呼の間に併存していたことになる。従って本遺跡も、これら遺跡群の一環としてとらえられる。8世紀から9世紀初頭へかけ、当地方は予想外の発展を示していたのである。現在、古代における遠田郡の範囲を明確に指摘することは出来ないが、少くも同郡中最も活況を呈していたのは、おそらくこの地域であったろう。

第2表（第19図・第21図　付表）

	出土遺物	トレンチ	層位	遺物番号	備考
D－1	高坏破片	Ⅱ	Ⅳ層上部	15	
D－2	土師器底部	Ⅱ	Ⅳ層中部	32	内面に籾痕あり 底面に木葉文あり
D－3	土師器椀破片	Ⅱ	住居址床面	14	
D－4	須恵器鉢破片	Ⅱ	〃	22	
S－1	有孔円盤破片	Ⅰ		36	
S－2	〃	Ⅰ		37	
S－3	〃	Ⅰ		38	
S－4	石釧	Ⅱ	Ⅳ層上部	34	
S－5	砥石	Ⅱ	〃	40	
S－6	〃	Ⅱ	〃	41	
S－7	〃	Ⅱ	〃	42	
S－8	有孔円盤	Ⅱ	Ⅲ層	35	
S－9	砥石	Ⅱ	住居址床面	43	
S－10	〃	Ⅱ	〃	44	
S－11	有孔円盤破片	Ⅱ		39	

写　真・図　版

第5図　小牛田町航空写真（○は遺跡を示す）

（宮城県小牛田町役場提供）

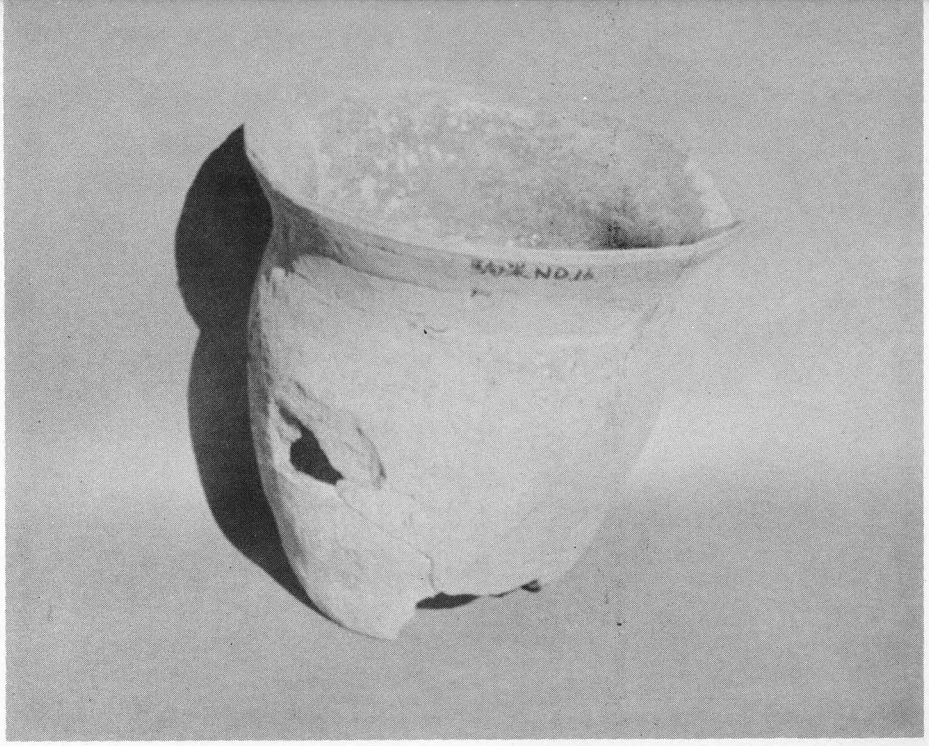
第6図　駒米遺跡全景
第7図　竈　　跡

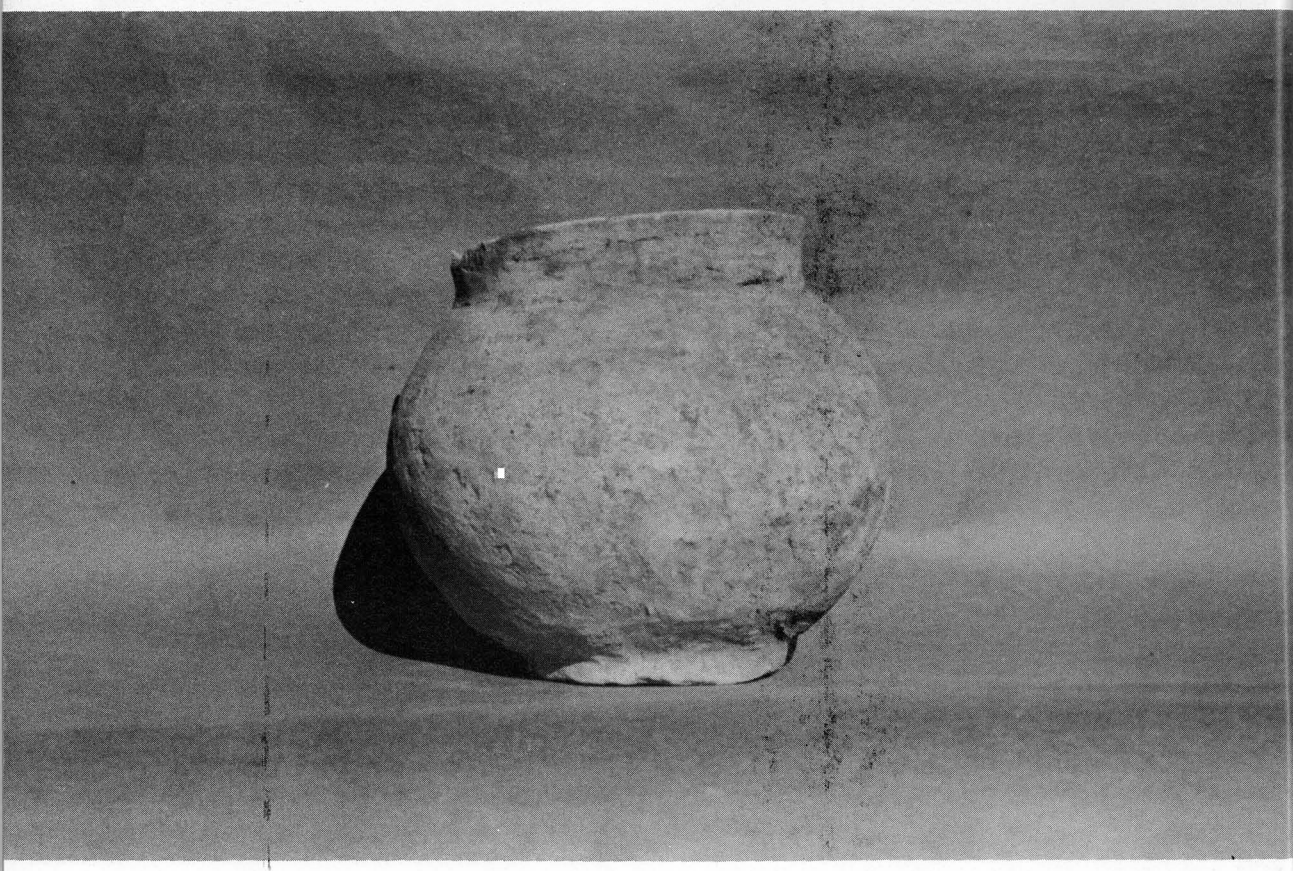
第8図　竪穴住居址（ポールの先端は北方を指す）
第9図　同　　上

第10図　甑出土状態

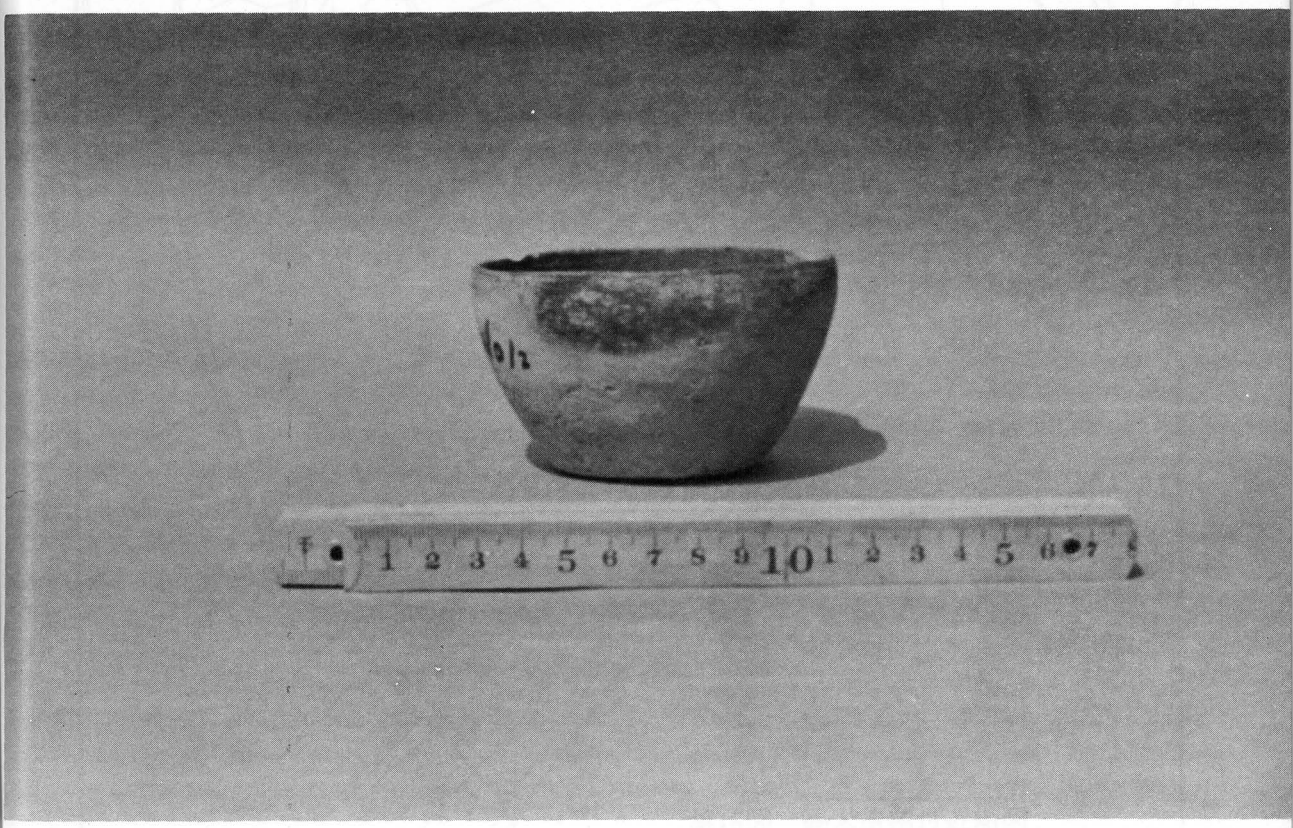
第11図　石釧模造品出土状態

第12図　砥石出土状態
第13図　同　　上

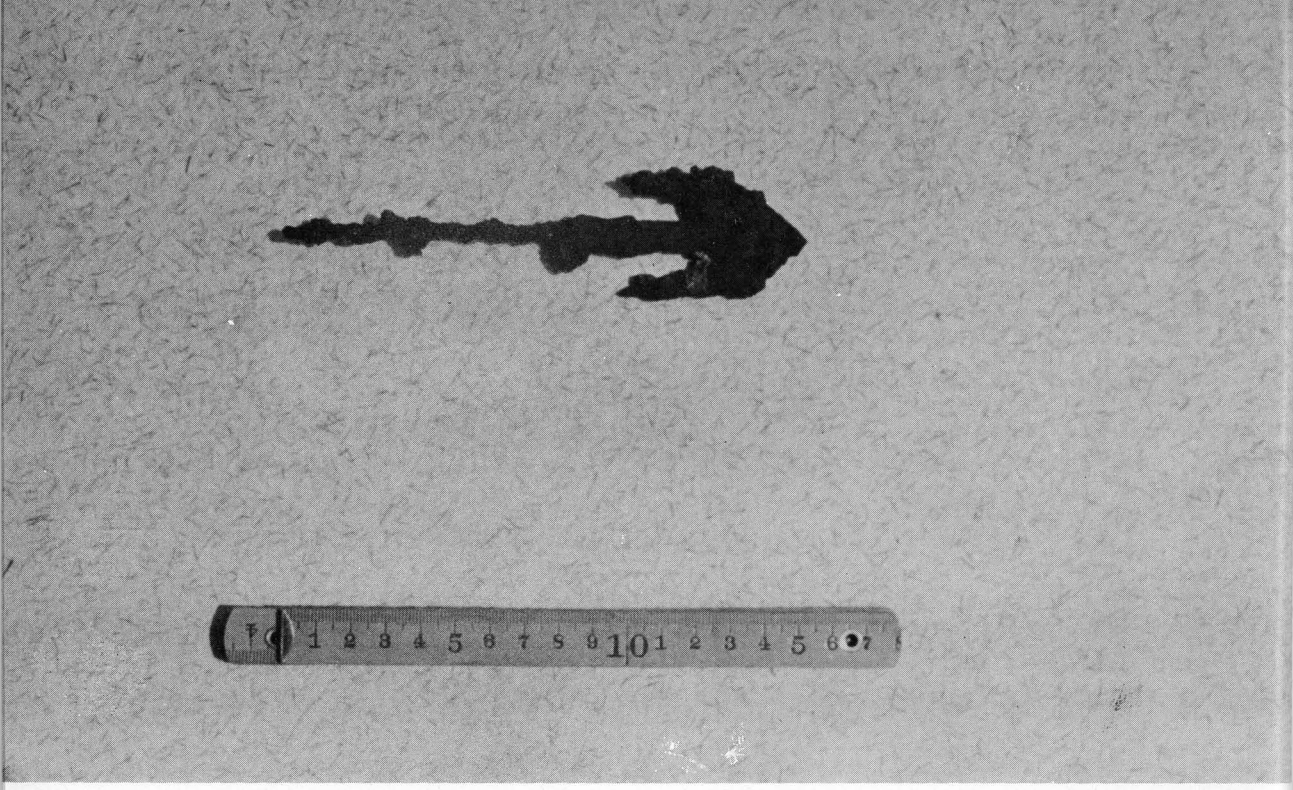




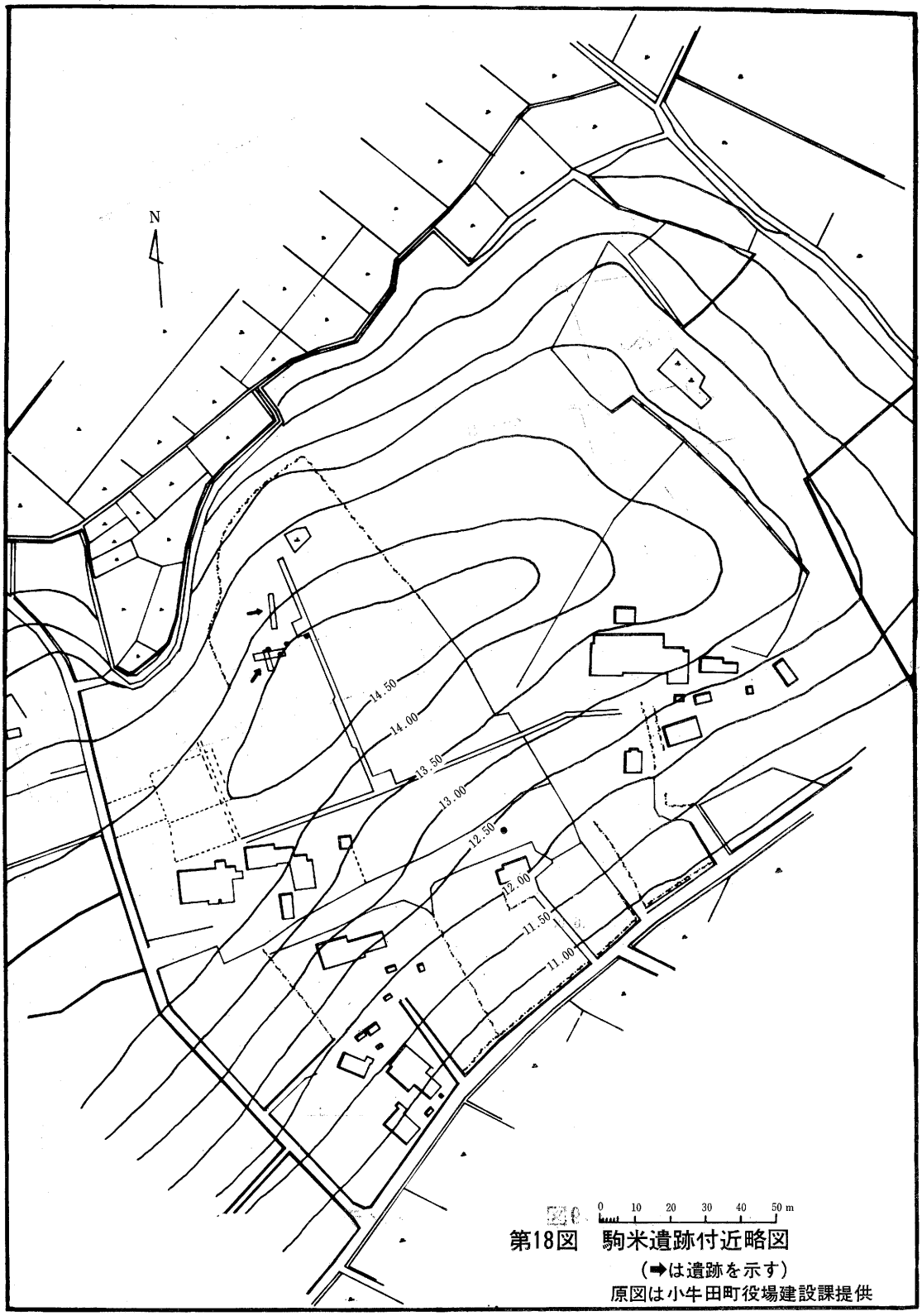
第14図　甑に転用された土師器鉢・壺



第15図　土　師　器　坏
第16図　土　師　器　埦



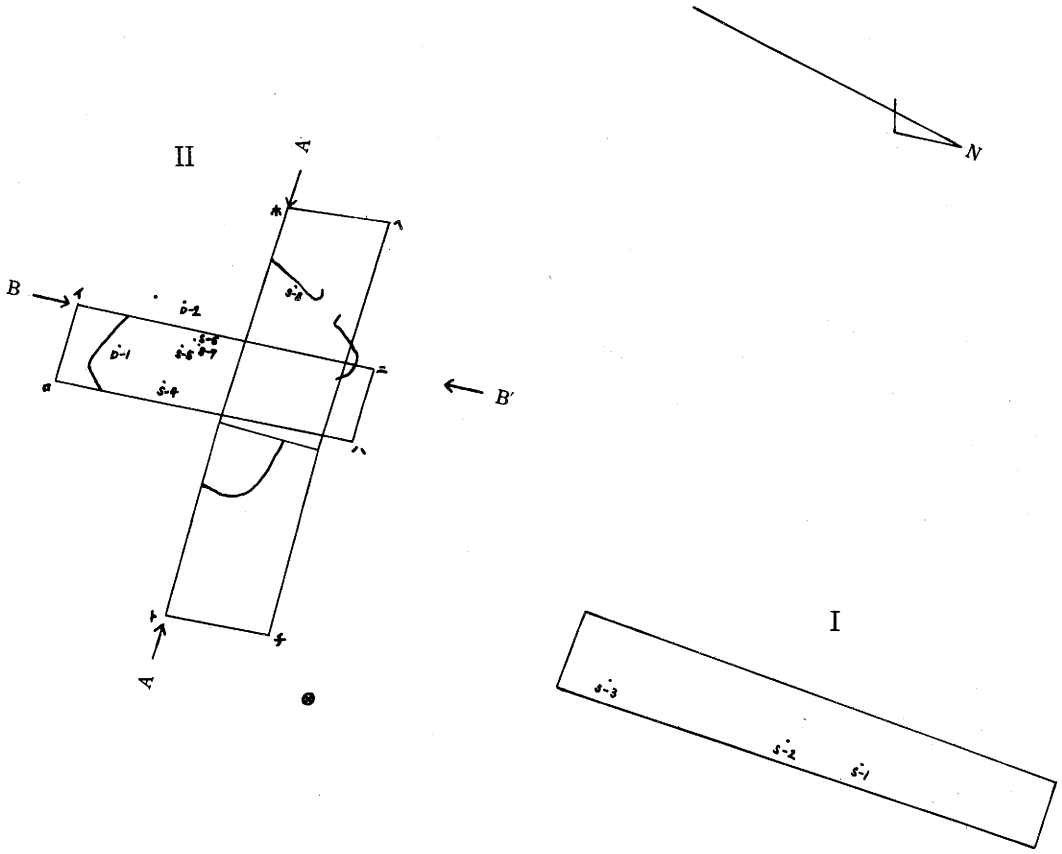
第17図　鉄　　鏃



第18図　駒米遺跡付近略図

（➡は遺跡を示す）

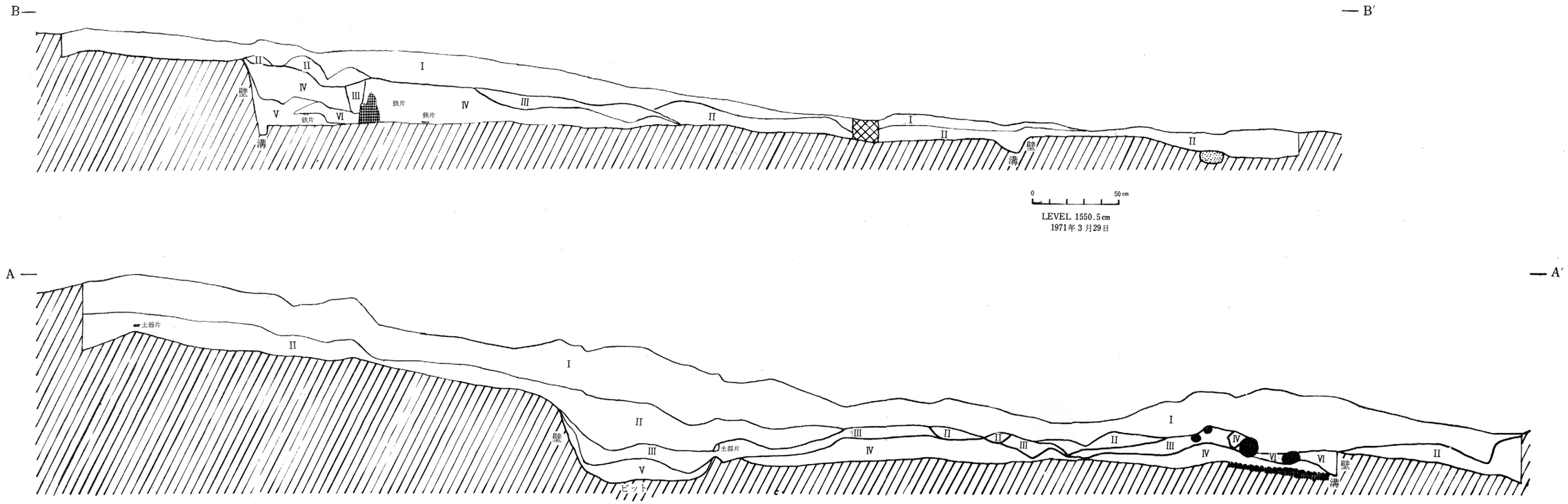
原図は小牛田町役場建設課提供



⊙LEVEL 16.03 m

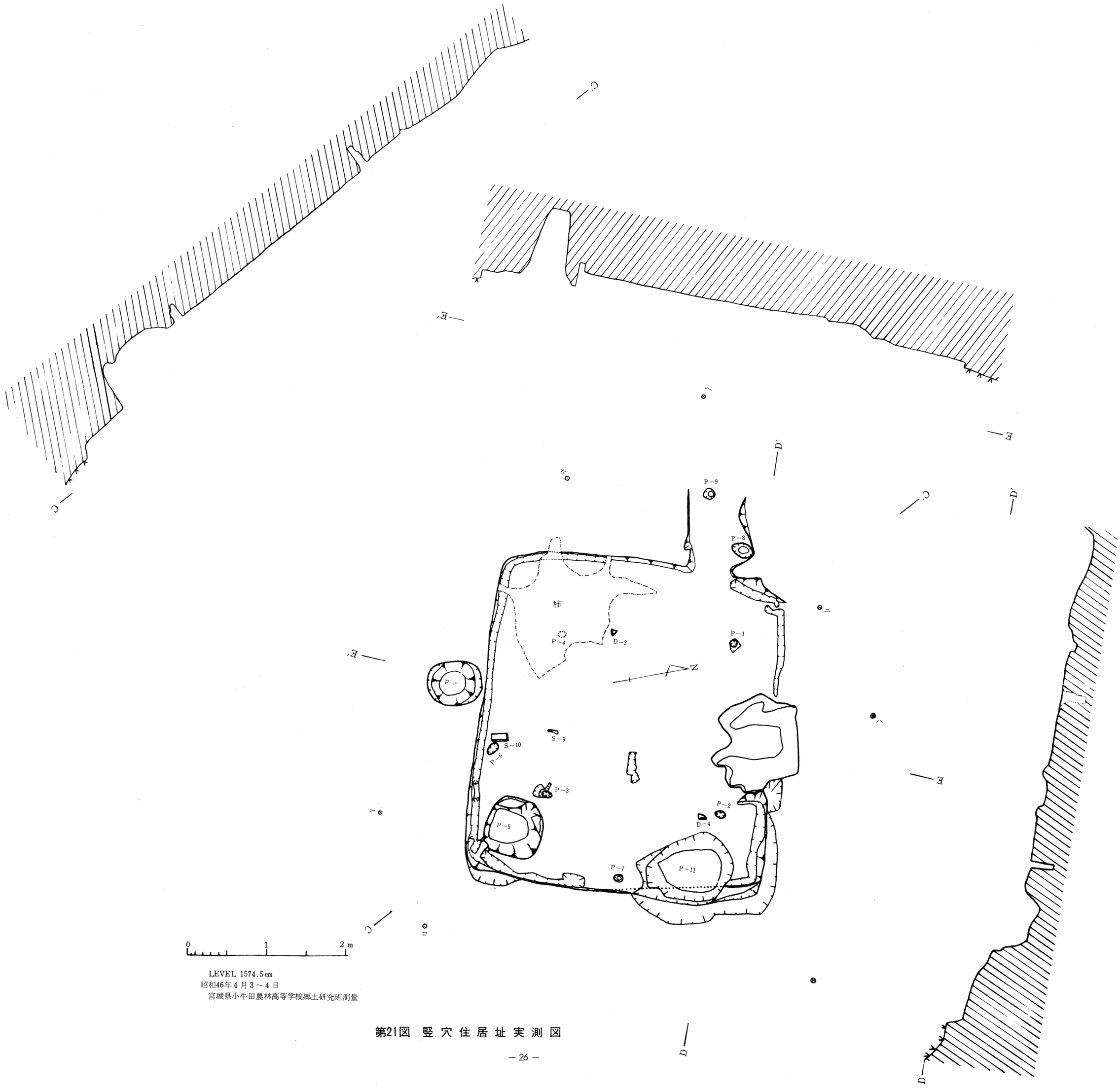
0 5 m

第19図　I・IIトレンチ実測図



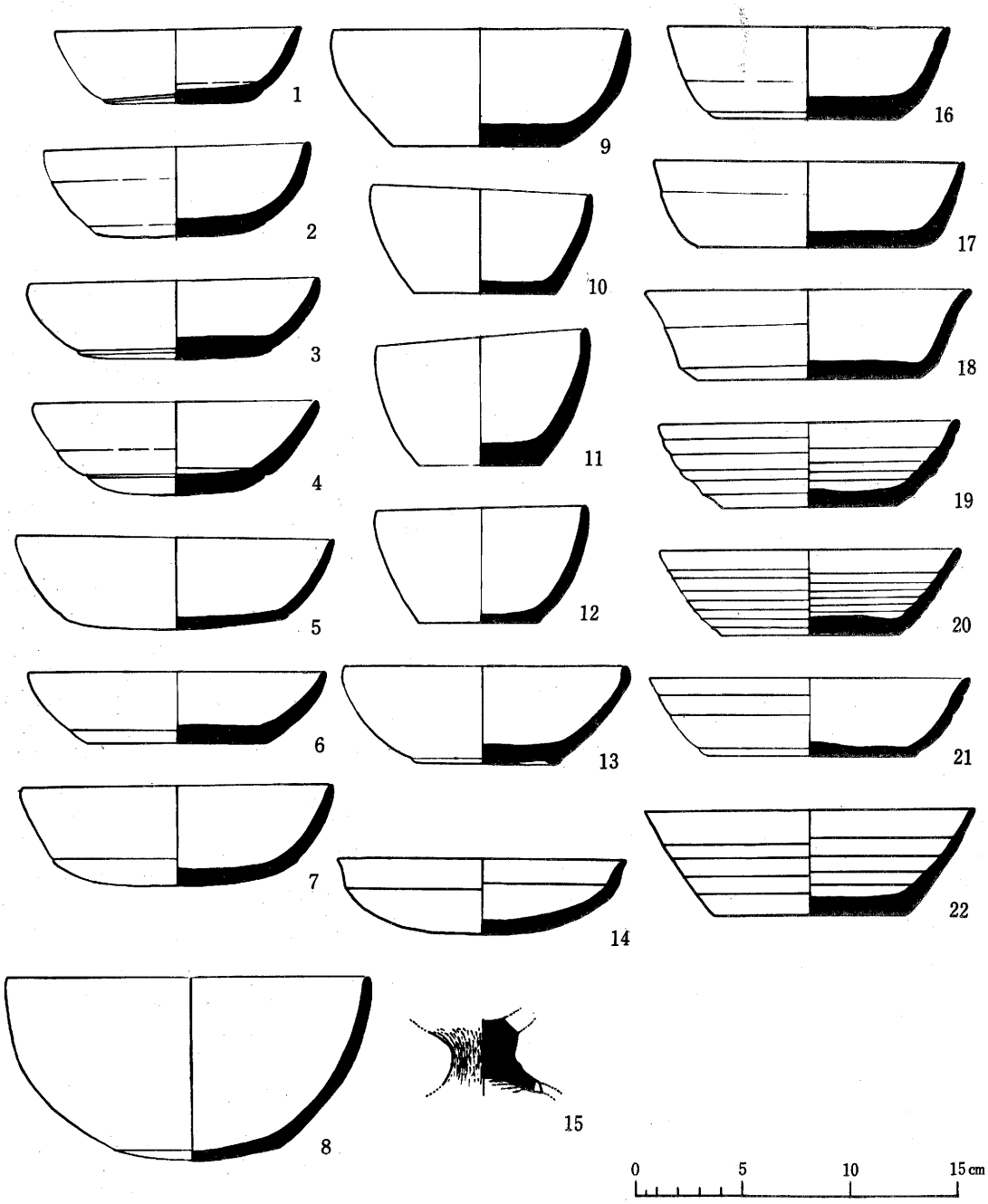
I 茶褐色土(表土，畑耕作により攪乱著しい)
II 〃 (粘土粒子混入土)
III 黒褐色土
IV 茶褐色土(I層に比し，僅かに色調が濃い)
V 黄褐色土(壁の崩土)とIV層土との混入土
VI 焼 土
● 木 の 根
攪 乱
土龍の坑道
地 山

第20図 第IIトレンチ実測図



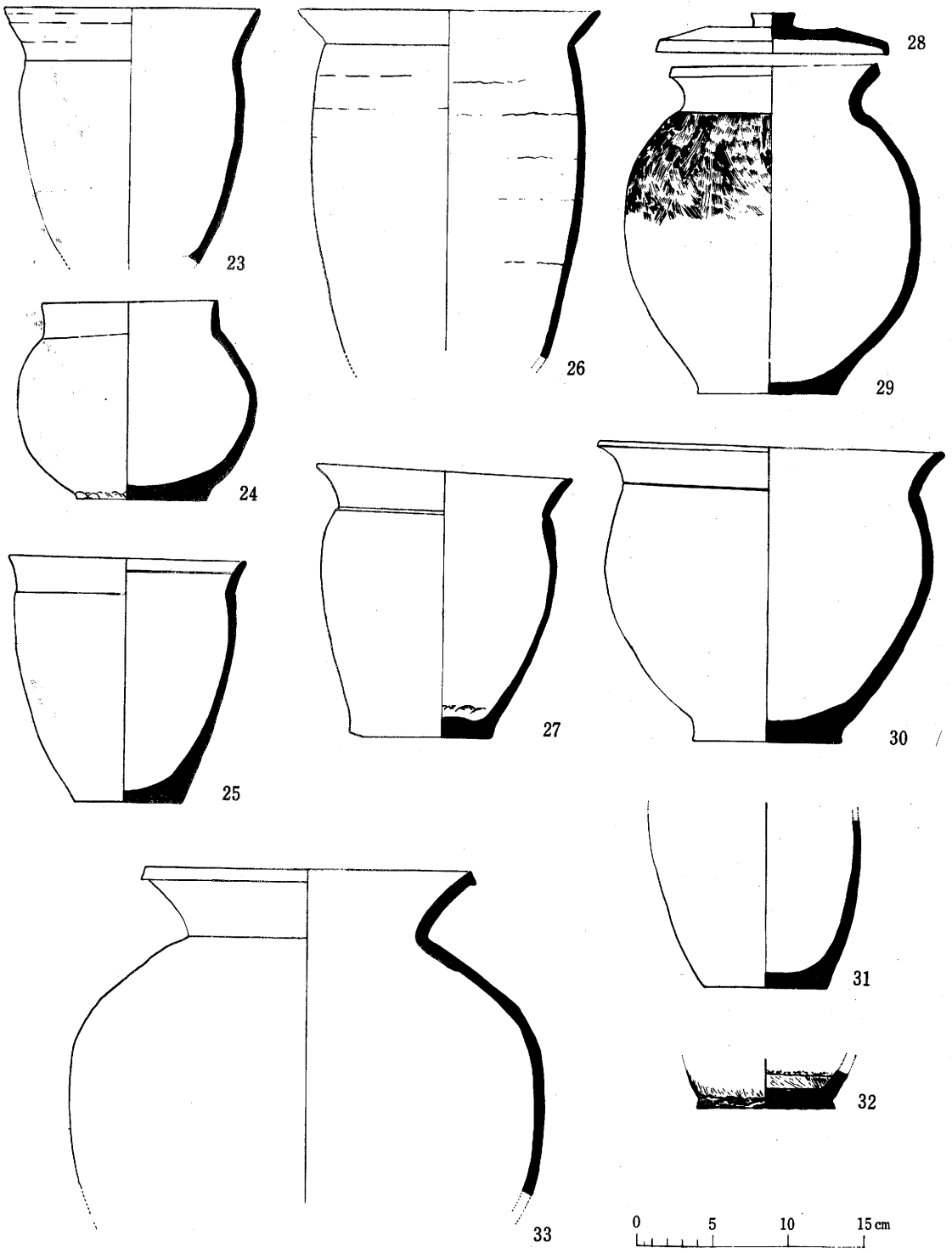
LEVEL 1574.5cm
昭和46年4月3～4日
宮城県小牛田農林高等学校郷土研究班測量

第21図　竪穴住居址実測図



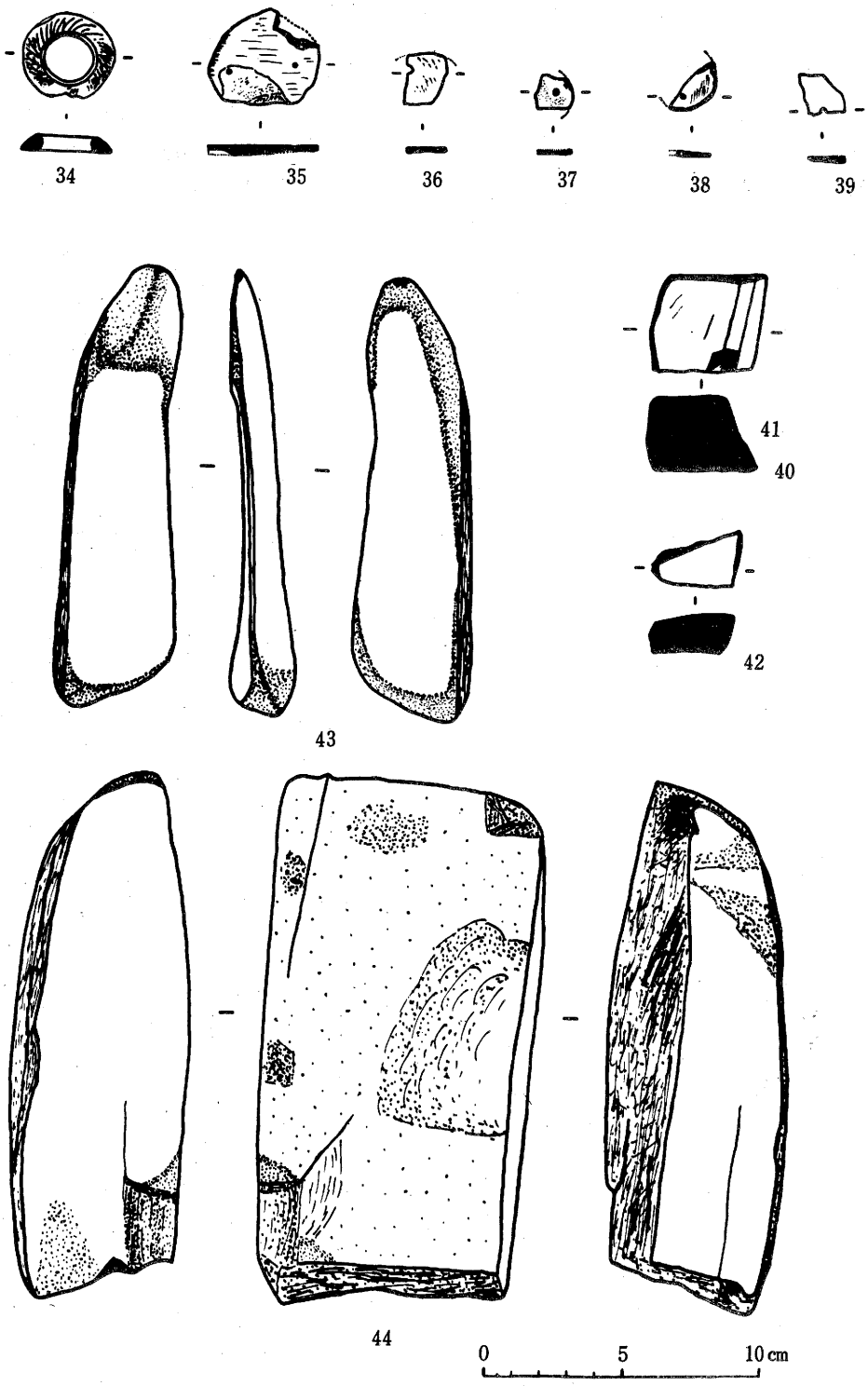
第22図　駒米遺跡出土品

土　師　器　1～15
須　恵　器　16～22



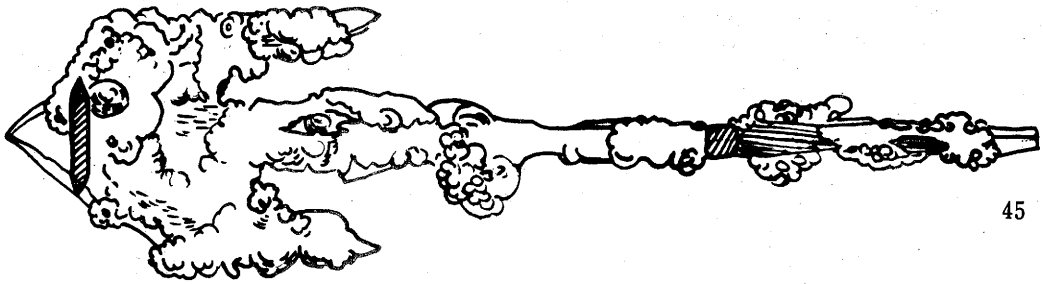
第23図　駒米遺跡出土品

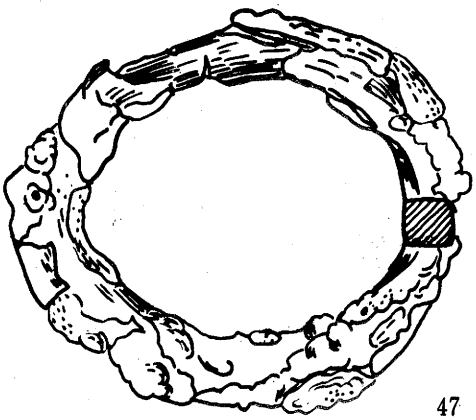
土　師　器　23～27，29～32
須　恵　器　28・33

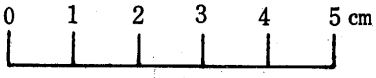


第24図　駒米遺跡出土品

石釧模造品　34
有孔円盤　35～39
砥　　石　40～44







第25図　駒米遺跡出土品

鉄　　鏃	45
鉄器片	46
鉄　　環	47

31

昭和４８年３月２５日印刷
昭和４８年３月３１日発行

宮城県小牛田町文化財調査報告Ⅰ
駒米遺跡
執筆・編集者　辺見鞆高
発行者　小牛田町教育委員会
印刷所　三友社
宮城県石巻市不動町二丁目１４の５

発行所　小牛田町教育委員会
宮城県遠田郡小牛田町字桜木町１９８の２
電話（０２２９３）２－２３７８
郵便番号　９８７